

寄稿 「作ることから始めよう」

國學院大學北海道短期大学部 教授 今野 道裕

小学校教員だった私も、保育系大学での18年を合わせ、46年教員として過ごしてきました。大学では「造形分野」の科目を中心に、「表現」現在は「言葉」の分野も教えています。その中で、感じてきたことをこの場を借りて振り返ってみようと思います。

「モノづくり」の好きな子どもでした。高校時代に人形劇に出会い、大学では教育を考えるようになり、なぜか網走管内の小さな学校ばかり勤務していました。小さな学校は何でも自分です、作る、が基本。この経験は、私の教育観にも大きな影響を与えています。

学校中を煙だらけにして、1・2年生と「焼きサンマ定食」を作ったことがあります。味噌汁に卵焼き付き！自分の作るご飯って、どうしてあんなに「おいしい！」のでしょうか。

子ども達の日記にメロディをつけて「歌」を作り、学芸会で歌ったことがあります。自分たちの歌は比べるものがなく自分たちが一番上手？なのです。その調子で、閉校になったときには学校の思い出を歌にして、全校児童で歌い閉校を惜しましました。

学生たちと「スポンジ人形」を作ったこともありました。初めて渡される白くて四角いスポンジから形を作っていく。スポンジを切るなんて、多分学生の誰も経験したことがなかったことでしょう。でも、人形が出来上がる頃には「私の子が一番かわいい」と言ったりします。

最近私は、教育や保育等でつきたい力を、右のような図で考えて学生に話しています。

「リズム」は音楽だけでなく、生きていく上でのリズムのこと。この部分が心地良いと、子ども達は自然に楽しく意欲的に活動してくれるようです。

「分ける」は「分析」「情報」と置き換えても良いのかもしれませんが、複雑に見えることも分けてみると、基本要素の積み重ねであることが何となくわかることが大事だと思うのです。でもこれは、他者にやらせようこともできなくはないことです。現代では、Googleやネット等がこの役割を担ったりもします。

対置する形で書いてあるのは「つなぐ」です。モノとモノ、人とモノ、人と人をつなぐことで、新しいことが生まれるのではないのでしょうか。そして、この「つなぐ」という作業で生まれる感情は、他者にその役割を譲ってはいけして得ることができません。「自分で作った」ご飯は「おいしい！」のです。自分が作った人形は「かわいい！」のです。「つなぐ」と「できる」、そして自分自身の「自信」にも繋がります。

ことば 思考・共有・記録	
わける わかる	つなぐ ☆できる
リズム 体・生活・心	

だから楽しい。心とやらはこの辺に根がありそうです。

これらの活動を考え、まとめ、友だちに伝え、記録として残すには「ことば」なくしてはできません。頭の中の内言とともに、外言や話すことで理解が深まる外内言も駆使しながら、考え、コミュニケーションを図ろうとするのです。だから、子どもに関わる大人は、真摯な言葉遣いに心掛ける必要があると思います。

そんな子ども達の頭がフル回転するのは、間違いなく「遊び」でしょう。「勉強」ではその使い方が限定的になる場合があります。「逃げ切るには?」「たくさん取るには?」「なりきるには?」、子ども達は全人生の記憶を繋ぎまくって、最適値を求めようとするのです。時には新しいルールや、新発明の道具も生まれたりします。これほどの「学び」が他にあるのでしょうか。講習会で作る「手づくりおもちゃ」等も、最終的には子ども達自身が作れるようになることが願いです。

絵本作家の加古里子氏は、子どもの遊びには「失敗」や「忘却」「改変」があつて良いと言っています。大人はそのような環境を保証しなくてはなりません。私の工作が折り紙や画用紙等ごく一般的な材料で作ることが多いのは、「子どもがくり返し作ってみることができる」ことを考えるためです。高価なもの、特殊な材料では「成功するしかない」ので、子どもは安心して楽しめません。

また「作る」の1つの頂点として「劇あそび」「劇」があると思います。役をすることは自分の中で「他者を作る」こと、また大道具や音楽効果・照明等も関わってみれば楽しいものです。しかし、残念ながら学校教育の中で「演劇」は大切にされてきたとは言えず、今は学芸会も時数減等、「絶滅の危機」というべき状態です（こぐま座・やまびこ座等の活動の重要さがここにもあります）。

現代においては、「情報」へのアクセス、処理の仕方等が必要であることは否定しませんが、子どもの時代においてはやはり実際に「作る」「遊ぶ」ことが重要なのではないのでしょうか。「作る」ことの楽しさは作った人だけがわかります。作ることのすごさ・大変さも知ることになり、そこから他者を思うことにもなります。これって、十分「心」を育てることになるのではないのでしょうか。

幼年期の教育を、「作る」という視点でもう一度見直すべきでは？私が最近考えていることです。

今野 道裕(こんのみちひろ)

1955年生まれ。高校時代より人形劇活動を始める。小学校教員28年、2006年～市立名寄短期大学教授を経て、國學院大學北海道短期大学部教授。
北海道人形劇協会副理事長、芸術と遊び創造協会会員、北海道教育学会会員、北海道芸術教育の会。ひとり人形劇団「オホーツク風雲ワクワク団」として活動中。
著書『作ってあそべる製作ずかん〜3・4・5歳児の保育に〜』(学研・2013年12月)



同時処理と継次処理のおはなし

小野寺 基史

私が札幌市教育センター(ちえりあ)で教育相談をしていた頃のエピソードです。

「今日はどんなことでご相談にいらっしゃいましたか?」「どんなことがお困りですか?」来談者と挨拶を交わした後、最初に発する言葉はだいたいこんな感じです。夫婦でいらっしゃった場合には、概ね、まず母親が口火を切ります。「先生、聞いてください。うちの子は学校に行けなくて…、勉強も…」

随分と心配し、悩み、やっとの思いで相談室に足を運んだのですから、募る思いは溢れんばかり。5分、10分、20分。話は延々と続きます。ふと隣を見ると、明らかにイライラしている父親の姿。突然、妻の話を制して口を開きます。「お前、ダラダラ話すんじゃないよ。何を言っているかわからないじゃないか。まずは結論から言えよ。結論から」ところが、母親も負けていません。「なに言ってるの。最初から順番に話さないと先生にわかってもらえないじゃない!」相談をしていると、こんな光景に出会うこともしばしば。しばらく夫婦のバトルに付き合うことになります。さて、ものごとを時間軸に沿って順番に処理

本連載は「視点を変えてみよう」というコンセプトで、「自分の視点(目線)だけでなく、相手の視点(目線)からもものを捉えてみる。定点だけでなく、多面的、多角的な視点(目線)からもものを捉えてみる」というテーマを進めていきます。

していく情報処理の仕方を「**継次処理**」、順序性より関連性が重視され、まず全体(結論)が先に提示されて、部分(原因等)があとからついてくる情報処理の仕方を「**同時処理**」といいます。このケース、お分かりのように母親は「継次処理」、父親は「同時処理」タイプです。ところで、ここで問題なのは、情報はいつも自分の得意とする伝え方(情報処理の仕方)で提供されており、そのことに自分は全く気付いていないという事実です。

一生懸命伝えているのに理解してもらえない、何となくウマが合わない、相手をイライラさせることが多いなどといった場合は、自分の伝え方が、相手の情報処理の仕方とズレていると考えてください。ヒントは自分の伝え方と真逆の伝え方(同時処理、または継次処理)を意識してみることです。そうすることで、意外とうまく伝わるのが少なくありません。

それは、子どもとの関係においても同じです。「**私たちの教え方で学べない子にはその子の学び方で教えなさい(上野一彦)**」という名言があります。子どもの情報処理に合わせた指示の出し方を工夫することで、子どもの理解

が劇的に変化することがあります(下図)。

もし、思い当たる子がいれば、その子のつまずきが気になっているなら、試しに、下のアプローチを参考に、子どもの情報処理に合わせた指示の出し方を検討してみてください。子どもの思わぬ反応にハッとすることもかもしれません…。

指導のポイント

【継次処理タイプ】

- 段階的な教え方
- 部分から全体へ
- 順序性の重視
- 聴覚的・言語的
手がかかり
- 時間的・分析的

【同時処理タイプ】

- 全体をふまえた
教え方
- 全体から部分へ
- 関連性の重視
- 視覚的・運動的
手がかかり
- 空間的・統合的

【参考文献】「長所活用型指導で子どもが変わる」(1998) 藤田和弘・青山真二・熊谷恵子編著/図書文化

小野寺 基史

(おのでもとふみ)

北海道教育大学 教育学研究科教職大学院特任教授
名寄市生まれ。北海道教育大学札幌分校を卒業後、小学校の教員、札幌市教育研究所・教育センター指導主事、のぞみ分校教頭、札幌市教育センター教育相談担当課長を経て、現職。学校心理士、特別支援教育士SV



MA・SO・BO 本 シェルジュ HON-CIERGE

本のご案内「本シェルジュ」
厳選本の紹介
荒井さん編 ①

荒井 宏明(あらい ひろあき)

一般社団法人北海道ブックシェアリング代表理事
札幌大谷大学社会学部、東海大学現代教養センター講師
北海道子ども読書推進委員



『ぼくがいちばんききたいことは』

著:アヴィ 翻訳:青山南 出版社:ほるぷ出版

この本を書いたアヴィさんはアメリカの作家で、冒険ものやミステリー、ファンタジー、童話など幅広い作風で知られます。そのジャンルの多彩さと瑞々しい描写は、日本でいうと宮部みゆきさんに近いかもしれません。



両親の離婚や再婚、そして死。さまざまな家族関係のピンチに直面する男の子が主人公です。幼いころは「親は完璧」「親は万能」と思い込み、それが揺るぎない世界観になりますが、「じつは完璧なひとなどいない」というのも真理です。それを受け入れられない主人公は、感情をあらわにし、苦悩しながら自分の採るべき道を探します。それは親も同じです。だれもが突き付けられた現実と折り合いをつけながら生きていかなければならないのです。

『みんなちがって、それでいいパラ陸上から私が教わったこと』

監修:重本 紗絵 著:宮崎 恵理 出版社:ポプラ社

1964年の第一回東京オリンピックのとき、初めて時期を合わせた障がい者によるスポーツ大会(第13回国際ストーク・マンデビル競技大会)が開かれました。1988年のソウル大会で正式名称が「パラリンピック」になり、2000年のシドニー大会からオリ・パラ同時開催になりました。シドニー大会は重本選手が6歳のときで、そのころはみんなに交じって勉強や運動することが「あたり前」と思い、中学校はハンドボールに全力を注いできましたが、大学1年でパラリンピックへの転向を進められ、苦しみます。しかしパラ選手として開花を支えたのは「あたり前」の時代に培った努力や精神力でした。人生で蓄積したものは様々な局面で生きることをこの本は教えてくれます。



『はじめての絵画の歴史』

一「見る」「描く」「撮る」のひみつ一

著:ディヴィッド・ホックニー、マーティン・ゲイフォード 出版社:青幻舎

『絵』の歴史は、洞窟からはじまって、iPadで終わっている。いまのところはね」と語りだすのは現代美術の第一人者、ディヴィッド・ホックニー氏。世界中にファンを持つ巨匠が古今東西の「絵」の案内人と解説を務めるこの本は、ディズニー映画のワンシーンやダ・ヴィンチの発想術、スマートフォンのカメラ機能など、幅広い題材を取り上げ、子どもも大人も無理なく読めます。登場する芸術家は歌川広重やゴッホ、モネ、ピカソなど約50人。「何も思いその絵を描いたか」「その絵を通じて何を伝えようとしたのか」というアーティストの意欲と情熱、創意工夫や技術が紹介されます。「アート大好き」の方から「美術ってなんだか遠い存在」という人まで楽しめる一冊です。



編集後記

平日頃から「ものづくり」が好きな人たちに囲まれて仕事をさせていただいている自分ですが、つくづく思うのは、子どもも大人も好きなことを見つける力こそが、幸せに生きる支えになっているのだということです。心を育てる土壌となるのは、作る・遊ぶの中で、感じる心や考える力が育まれていくのですよね!(柳本)

札幌市中島児童会館 tel 011-511-3397
札幌市こどもの劇場こぐま座 tel 011-512-6886
〒064-0931 札幌市中央区中島公園1番1号
(地下鉄南北線「中島公園駅」3番出口より徒歩1分)

MA・SO・BOに関する最新情報、
MA・SO・BO通信のバックナンバーは
ホームページからご覧いただけます。

